報道発表

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和６年２月２８日

令和５年度（第 74 回）芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞の決定

文化庁では、昭和２５年から毎年度、芸術各分野において、優れた業績を挙げた方、又は新生面を開いた方に対して、芸術選奨文部科学大臣賞、同新人賞を贈っています。この度、本年度の受賞者が別紙のとおり決定いたしました。

１．趣旨

芸術各分野において、毎年、優れた業績を挙げた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資するものです。

２．部門・贈賞

演劇、映画、音楽、舞踊、文学、美術Ａ、美術Ｂ、メディア芸術、放送、大衆芸能、芸術振興、評論の１２部門（大臣賞・新人賞ともに各部門原則として２名以内）にて実施。受賞者には賞状と、大臣賞には１２０万円、新人賞には８０万円の賞金が贈られます。

３．贈呈式・祝賀会

３月１２日（火）都内ホテルにおいて行います。

４．取材申込について

取材を御希望の報道関係者は、３月８日（金）正午までに別紙取材申込書に必要事項を記載の上、電子メールにてお送りください。

※贈呈式の詳細な時間、場所については事前登録の御連絡を頂いた際にお知らせします。（セキュリティーの都合上、贈呈式の詳細な時間、場所については、式終了後まで公表しないようにお願いします。）

＜担当＞文化庁参事官（芸術文化担当）付
参事官補佐：吉野　千津（内線 2084）
舞台芸術係：草野　美音（内線 4782）
電話：０３－５２５３－４１１１（代表）
０３－６７３４－４７７６（直通）

【参考】昨年度からの変更点

優れた芸術家等に国の顕彰を受ける機会を十分に確保できるよう、芸術選奨は令和５年度に下記のとおり拡充しました。

＜対象部門＞

美術分野における表現方法の多様化に伴ない、映像、メディアアート、その他新傾向の作家を対象に加え、美術部門を美術Ａ・美術Ｂ部門に区分し部門を増

＜贈賞件数＞

原則１名以内となっていた一部部門の文部科学大臣賞及び全部門における文部科学大臣新人賞の贈賞件数を原則２名以内に増

＜賞金＞

大臣賞：３０万円→１２０万円

新人賞：２０万円→８０万円

令和5年度（第74回）芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：23名と1組　文部科学大臣新人賞：23名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	片岡（カタオカ） 愛之助（アイノスケ）	歌舞伎俳優	「夏祭浪花鑑（ナツマツリナニワカガミ）」ほかの成果
		山西（ヤマニシ） 惇（アツシ）	俳優	「エンジェルス・イン・アメリカ」ほかの成果
	新人賞	生田（イクタ） みゆき	演出家	「占領の囚人たち」ほかの成果
		中村（ナカムラ） 勘九郎（カンクロウ）	歌舞伎俳優	「大江山酒呑童子（オオエヤマシュテンドウジ）」ほかの成果
映画	大臣賞	岩井（イワイ） 俊二（シュンジ）	映画監督	「キリエのうた」の成果
		佐藤（サトウ） 浩市（コウイチ）	俳優	「春に散る」「愛にイナズマ」ほかの成果
	新人賞	池松（イケマツ） 壮亮（ソウスケ）	俳優	「せかいのおきく」「白鍵と黒鍵の間に」ほかの成果
		鶴岡（ツルオカ） 慧子（ケイコ）	映画監督	「バカ塗りの娘」の成果
音楽	大臣賞	杉山（スギヤマ） 洋一（ヨウイチ）	指揮者・作曲家	「湯浅譲二 作曲家のポートレート」ほかの成果
		福原（フクハラ） 徹（トオル）	邦楽囃子笛方	「福原徹演奏会　徹の笛」ほかの成果
	新人賞	大西（オオニシ） 宇宙（タカオキ）	声楽家	「ニュルンベルクのマイスタージンガー」ほかの成果
		菊央（キクオウ） 雄司（ユウジ）	地歌箏曲・平家・胡弓演奏家	「菊央雄司地歌演奏会」ほかの成果
舞踊	大臣賞	鈴木（スズキ） 稔（ミノル）	振付家	バレエ「ドラゴンクエスト」ほかの成果
		吉村（ヨシムラ） 古ゆう（コ）	日本舞踊家	「こうの鳥」「善知鳥（ウトウ）」ほかの成果
	新人賞	秋山（アキヤマ） 瑛（アキラ）	バレエダンサー	「かぐや姫」「ジゼル」ほかの成果
		速水（ハヤミ） 渉悟（ショウゴ）	バレエダンサー	「ドン・キホーテ」ほかの成果
文学	大臣賞	柴崎（シバサキ） 友香（トモカ）	小説家	「続きと始まり」の成果
		乗代（ノリシロ） 雄介（ユウスケ）	小説家	「それは誠」の成果
	新人賞	高瀬（タカセ） 隼子（ジュンコ）	小説家	「いい子のあくび」の成果
美術A	大臣賞	蔡（サイ） 國強（コッキョウ）	現代美術家	「蔡國強　宇宙遊（ウチュウユウ） —〈原初火球（ゲンショカキュウ）〉から始まる」展の成果
		須藤（スドウ） 玲子（レイコ）	テキスタイル・デザイナー	「須藤玲子：NUNOの布づくり」展ほかの成果
	新人賞	安藤（アンドウ） 正子（マサコ）	画家	「安藤正子展 ゆくかは」ほかの成果
		大巻（オオマキ） 伸嗣（シンジ）	美術作家	「大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ」展ほかの成果
美術B	大臣賞	石川（イシカワ） 真生（マオ）	写真家	「石川真生　私に何ができるか」の成果
		宮本（ミヤモト） 佳明（カツヒロ）	建築家・早稲田大学教授	「入るかな？はみ出ちゃった。～宮本佳明　建築団地」の成果
	新人賞	梅田（ウメダ） 哲也（テツヤ）	アーティスト	個展「wait this is my favorite part　待ってここ好きなとこなんだ」ほかの成果
		西澤（ニシザワ） 徹夫（テツオ）	建築家	「偶然は用意のあるところに」展の成果
メディア芸術	大臣賞	井上（イノウエ） 雄彦（タケヒコ）	漫画家・アニメーション監督	「THE FIRST SLAM DUNK」ほかの成果
		田村（タムラ） 由美（ユミ）	漫画家	漫画「ミステリと言う勿れ」ほかの成果
	新人賞	加藤（カトウ） 隆生（タカオ）	株式会社 SCRAP 代表取締役社長	「終わらない夏祭りからの脱出」ほかの成果
		和田（ワダ） 淳（アツシ）	アニメーション作家	「いきものさん」の成果
放送	大臣賞	野木（ノギ） 亜紀子（アキコ）	脚本家	「フェンス」の成果
		山﨑（ヤマザキ） 裕侍（ユウジ）	プロデューサー	「閉じ込められた女性たち～孤立出産とグレーゾーン～」ほかの成果
	新人賞	石原（イシハラ） 大史（ヒロシ）	ディレクター	「“冤罪（エンザイ）”の深層～警視庁公安部で何が～」ほかの成果
		長田（オサダ） 育恵（イクエ）	脚本家・劇作家	「らんまん」の成果
大衆芸能	大臣賞	宝井（タカライ） 琴調（キンチョウ）	講談師	国立名人会「名月若松城」ほかの成果
		藤井（フジイ） フミヤ	歌手	「40th Anniversary Tour 2023-2024」ほかの成果
	新人賞	桂（カツラ） 小すみ（コ）	音曲師	「国立演芸場3月中席」ほかの成果
		ねづっち	漫談家	「ねづっちのイロイロしてみる60分」ほかの成果
芸術振興	大臣賞	荒井（アライ） 洋文（ヒロフミ）	民間文化施設「犀の角（サイ ツノ）」代表・舞台芸術プロデューサー・制作者	文化施設「犀の角（サイ ツノ）」における活動の成果
		ルシール・レイボズ 仲西（ナカニシ） 祐介（ユウスケ）	KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 共同創設者・共同代表	「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」ほかの成果
	新人賞	今西（イマニシ） 善也（ゼンヤ）	ZENBI-鍵善良房-KAGIZEN ART MUSEUM 館長	企画展「宮永愛子ー海をよむ」ほかの成果
		川崎（カワサキ） 陽子（ヨウコ）	KYOTO EXPERIMENT 共同ディレクター	「KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2023」の成果
評論	大臣賞	鈴木（スズキ） 聖子（セイコ）	大阪大学大学院助教	「掬われる声、語られる芸　小沢昭一と『ドキュメント 日本の放浪芸』」の成果
		マイク・モラスキー	早稲田大学教授	「ジャズピアノ——その歴史から聴き方まで」（上・下）の成果
	新人賞	原（ハラ） 瑠璃彦（ルリヒコ）	静岡大学専任講師	「洲浜論」の成果
		堀（ホリ） 朋平（トモヘイ）	音楽学者	「わが友、シューベルト」の成果

※敬称略・部門内50音順

令和5年度（第74回）芸術選奨
文部科学大臣賞　贈賞理由

令和5年度（第74回）芸術選奨 贈賞理由一覧　　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	片岡　愛之助	大阪生まれ、大阪育ちの生粋の上方役者として貴重な存在。令和5年は当たり役「夏祭浪花鑑（なつまつりなにわかがみ）」の団七九郎兵衛（だんしちくろべえ）を毛穴の一つ一つから大坂の匂いが噴き出すように演じ、市井の片隅で必死に男を磨いて生きる男の切なさにまで踏み込む演技を見せた。「廓文章（くるわぶんしょう）」の伊左衛門（いざえもん）では上方和事の最高峰の役どころを絶妙のやわらかみとおかしみで体現。「三人吉三巴白浪（さんにんきちさともえのしらなみ）」のお坊吉三（きちさ）、「弁天娘女男白浪（べんてんむすめめおのしらなみ）」の弁天小僧菊之助などの江戸歌舞伎、さらには新作歌舞伎まで幅広く、現代の歌舞伎界を牽引（けんいん）する一人と言える。
演劇	山西　惇	演じる人物の幅の広さに目を見張る。令和5年、「エンジェルス・イン・アメリカ」では頑として同性愛者だと認めない憎々しい大物弁護士を、豪放磊落（ごうほうらいらく）な頑固者と子供のような無邪気さ、その両面を合わせ持つ独特な人物像に説得力を持って仕立ててみせた。また「闇に咲く花」では一転して繊細で内気な神主を緻密につくりこんで観客の共感をさらった。円熟味が増す近年、今後も唯一無二の人物像を数多く観客に届けてくれるだろう。
映画	岩井　俊二	ギリシャ語で「主よ」を意味するキリエ。「キリエのうた」とは、「キリエ・エレイソン（主よ、憐（あわれ）みたまえ）」を繰り返すミサ曲のこと。ここでは名前を捨てた二人の女性と、この困難な世を生きる人々へ贈る讃歌（さんか）でもある。震災によって、貧困によって、全てを失った二人が、自身の力と揺るぎない友情によって未来を切り開こうとする。それを音楽で紡ぐ。岩井俊二氏の映画は、作中の音楽同様、大量消費を目的とせず、必要とする人のために作られる。支持する層は広く、口伝えで国内外に広がっている。
映画	佐藤　浩市	「春に散る」では主役の一人として、元ボクサーを目つきも体の動きも鋭く説得力を持って演じ、脇に回った「愛にイナズマ」では一転、一見頼りないが芯のある父親をコミカルに見せた。青春時代劇「せかいのおきく」では、重しとして若者たちを支える。佐藤浩市氏は年齢を重ねるごとに奥行きと深みを増し、役の剛柔、大小を問わずしなやかに演じてスクリーンに存在し続ける。後進に心を配る姿勢も含め、円熟という言葉がふさわしい。
音楽	杉山　洋一	杉山洋一氏は、令和5年、本拠の欧州はもとより、我が国においても極めて充実した活動を行った。作曲界の巨匠、湯浅譲二の「作曲家のポートレート」と題された演奏会では、東京都交響楽団の指揮台に立ち、新作「オーケストラの軌跡」初演のほか、彼の1970年代半ばの傑作に新たな光を当て、さらに20世紀の古典を鮮やかに現代に甦（よみがえ）らせた。加えて、NHK交響楽団の公演で余人をもって代え難い存在であることを改めて印象付け、また、自作「ヴァイオリン協奏曲「ラ・フォリア」」の初演でも、豊かな才能を遺憾なく発揮した。
音楽	福原　徹	篠笛（しのぶえ）の澄み渡った音色と能管の力強い表出力を駆使し、長唄や浄瑠璃を彩る邦楽囃子（ほうがくばやし）の笛。これに加えて福原徹氏は、独奏曲や笛中心の合奏曲の創作と発信を通じて、ともすれば脇役的立場に置かれがちな笛の世界を拡（ひろ）げてきた。近年は箏曲（そうきょく）との合奏においても、尺八や胡弓（こきゅう）に代わる新たな笛の手付（てつけ）によって楽曲に清新な陰影を与えることに成功している。「第13回福原徹演奏会　徹の笛」をはじめとする2023年の公演は、こうした多彩な活動の成果が集約的に示される場となった。
舞踊	鈴木　稔	鈴木稔氏は、スターダンサーズ・バレエ団の常任振付家を長く務め、これまで着実に実績を積み重ねて日本のバレエ界を支えてきた。中でも令和5年に再演されたバレエ「ドラゴンクエスト」では、ゲームとバレエを融合させた世界観を見事に舞台化し、バレエという芸術の可能性を押し広げた。古典作品をオリジナルの物語で作り直した「くるみ割り人形」も、氏の演出・振付の創意が光る魅力的なバレエ作品である。令和5年はコンテンポラリーダンス作品「MISSING LINK」でも、独創的な振付語彙で変化に富んだ構成を実現し、優れた成果を上げた。

令和5年度（第74回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	吉村　古ゆう	「こうの鳥」の主役・母鳥を研ぎ澄ました舞で表現した。父鳥との情、抱卵の静かな愛、タカと戦う激しい母性、悲劇的な死と、傑出した力量を示した。吉村流4世家元、吉村雄輝作舞・演出・主演の初演から64年ぶりの復活。意義は大きい。「善知鳥」は、地獄に堕（お）ち救済を願う猟師の霊を、しなやかで流麗な舞で表現。雄輝初演の型も伝えた。「日本舞踊キャラバン京都公演」で「雪」を着流しで舞ったのも充分な実力を示した。
文学	柴崎　友香	柴崎友香氏の「続きと始まり」は、無関係な3人の男女の、2020年3月からの2年間を、個別に描く長編。未知の病原体の出現で「日常」を奪われた彼らは、経験した震災や映像で知る事件の記憶を引きずりながら、日々を過ごす。だが感じたことは、時の経過とともに少しずつ失われているのだ。静謐（せいひつ）な文体で、社会の光景と、個人の渾然（こんぜん）とした内部を、地道に確実に捉えていく。現代小説の新領域を開く、優れた作品である。
文学	乗代　雄介	乗代雄介氏の「それは誠」は、高校生たちが修学旅行の自由行動に割り当てられた時間でささやかな冒険をするという、友情を基礎にしたストレートな青春小説であると同時に、孤独感を覚えながら生きることを肯定しようとする意志に貫かれた小説である。語り手の「誠」という名前が示唆するように、小説が言葉で成り立っているという意識も明らかで、ところどころにハッとするような言葉や胸を打つ言葉が見いだせる。小説の面白さを知ってもらうためにも、是非多くの若い読者に読んでもらいたい作品であり、高く評価したい。
美術A	蔡　國強	国際的に高く評価されている蔡國強氏は、火薬で屏風（びょうぶ）に描いた作品を発表した1991年の個展「原初火球(げんしょかきゅう)」展を、その後に展開する各プロジェクトの重要な出発点と位置付けている。本展では、この30年前の作品から近年のネオンを使用したキネティック・ライト・インスタレーションまでを同一会場内に展示し、自身の活動の軌跡と未来への展望を示した。特集展示「蔡國強といわき」は、作家としての形成期を過ごした日本への想いを伝えている。
美術A	須藤　玲子	布は本来、何かを纏（まと）うために作られた素材（支持体）であるが、須藤玲子氏の「布」はそれ自体が綿密に構築された立体造形である。氏は、氏を支えるチームNUNOや各地の工房、職人と共に実験を繰り返し、布そのものを主役に表現の可能性を探る。2.5mの巨大な鯉（こい）のぼりを大量に中空に泳がせる一方で、小さな布片をびっしりと並べて体感させる。2019年香港のCHATに始まった個展の欧州凱旋（がいせん）帰国展となる当概展は、日常のささいな発想から生じる過程を、素材、道具、素描、映像、音と布で会場構成した。テキスタイルが、新旧の技術や感性の融合であると同時に人々の生活を護（まも）るサスティナブルな社会性の象徴となり得ることを示した。
美術B	石川　真生	戦後、アメリカ統治下の沖縄に生まれた石川真生氏は、1970年代から半世紀にわたり、土地と生そのものを沖縄で生きる人間として撮り続けている。人々の生き様が圧倒的な写真の力で生々しく集積された作品群は、国内のみならず国際的にも高い評価を受けている。2023年には、東京では初となる初期代表作から最新作まで一堂に会する大規模個展「石川真生 私に何ができるか」が開催された。2014年からは、琉球（りゅうきゅう）国時代から現代までの歴史を紡ぎながら、住民たちとつくりあげる創作写真とも呼ばれる大作のシリーズ「大琉球写真絵巻」に取り組み、闘病の中にあっても写真家として「私に何ができるか」を実践し続けている。
美術B	宮本　佳明	宝塚市立文化芸術センターでの「入るかな？はみ出ちゃった。～宮本佳明 建築団地」は、宮本佳明氏が設計してきた建築作品群のそれぞれ一部分を実寸大模型で紹介する企画展であった。「震災の記憶」をとどめる「ゼンカイ」ハウスでも知られる氏の「建築とは記憶の器である」という考えは、従来の建築展を大胆かつ創造的に逸脱する手法によって、広く一般の観客に届く魅力を獲得した。建築家としての思想と矜持（きょうじ）を柔軟にひらいてみせた姿勢は、説得力を持って評価された。

令和5年度（第74回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	井上　雄彦	「THE FIRST SLAM DUNK」は映像化されていなかった原作のクライマックスを、原作者の井上雄彦氏自らが監督して映画化した。映画の大半は3DCGが用いられたが、氏自身が大量の絵を描き下ろし指示を出すことで、氏のビジョンが見事に映像として定着された。これはまごう方なき“アニメーション映画監督”の仕事である。国内外での大ヒットも、この仕事あっての達成と言える。また本作で新たに描かれた家族のドラマは、原作連載時から現在に至る間における、氏の作家的な深まりを感じさせるものでもあった。
メディア芸術	田村　由美	少女漫画界で長期にわたり第一線を走り続ける田村由美氏。文明崩壊後の日本を描く冒険譚（ぼうけんだん）「BASARA」や、SFサバイバル「7SEEDS」、そして2022～2023年、ドラマ・映画化もされ大ヒットした「ミステリと言う勿（なか）れ」などジャンルを問わず幾つもの名作を生み出してファンを虜（とりこ）にしてきた、日本の漫画界を代表する作家である。魅力あふれるキャラクターが繰り広げる重厚かつ壮大なストーリーを次々と生み出してきた氏は、2023年でデビュー40周年を迎えた。40年もの長期にわたって第一線で活躍し、常に新境地を開拓していくその手腕と功績に芸術選奨をもって敬意を表したい。
放送	野木　亜紀子	野木亜紀子氏が脚本を手がけた「フェンス」は、沖縄をめぐる諸問題を徹底的な取材を基に真正面から描いた勇気あるドラマである。タイトルは米軍基地を囲むフェンスを指し、日米地位協定による基地への不可侵性を意味する。しかし、それだけではなく、本土と沖縄、男と女、親と子、肌の色など様々なところに不可視のフェンスが存在することを鋭く描き出した点に本作の真髄がある。私たち自身も無自覚的に創り出しているフェンスにいかに気付き、二元論を超えてゆくかを真摯に問う、稀有（けう）な脚本である。
放送	山﨑　裕侍	「閉じ込められた女性たち～孤立出産とグレーゾーン～」は、「望まない出産」に追い込まれた一人の女性を、胎児殺害の刑事被告人としてでなく、不寛容な社会で行き場を失った弱者として描いた。山﨑裕侍氏は、主人公と同世代の女性記者をディレクターに配し、その共感の眼差（まなざし）を作品に反映させた。 氏の取材の原点は「権力の監視」である。過去の作品においても「民主主義の危機」や「核のゴミ」など、この国に山積する「歪（ゆが）み」に果敢に切り込み、強い説得力で視聴者に発信し続けた。
大衆芸能	宝井　琴調	軍談や世話物など講談の多彩を縦横無尽に読み込む話芸は定評が高く、中でも兄弟の情、主従の情の描き方は抜きん出ている。名将伝である「名月若松城」では、主従の相聞や意地を持ち前の柔らかい話芸で伝えた。高座の一方、令和5年は講談協会の会長に就任し、新たな講釈場の獲得や後進の育成にも尽力。講談の旗を守り続ける最前列に立つ。落語協会にも所属し、落語の老舗定席・鈴本演芸場では夏冬にトリを務めるほど重宝されている。話芸と指導性、その両方を高く評価できる。
大衆芸能	藤井　フミヤ	昭和58年、チェッカーズのリードシンガーとしてデビュー。「ギザギザハートの子守唄」「涙のリクエスト」など多数のヒットを放ち、ファッション面も含め社会現象を巻き起こした。解散後はソロ活動へ。平成5年のシングル「TRUE LOVE」は200万枚超の大ヒットを記録している。さらに音楽と並行してアート作品を発表したり建築関係のプロデュースを手掛けたり、幅広く活動中。令和5年からはデビュー40周年を記念した「40th Anniversary Tour 2023-2024」で全国47都道府県60公演を展開し、変わらぬ勢いを印象付けた。
芸術振興	荒井　洋文	荒井洋文氏が平成28年にオープンした民間の文化施設「犀（さい）の角（つの）」は上演、地域演劇支援、上田街中演劇祭などを実施するほか、地域NPO法人や映画館、市民、行政などと協力し「のきした」と名付けた緩やかな連帯を築いている。氏は、地域の人々に寄り添う独自の事業を推し進め、令和5年は、さらに、インド・ケーララ州にある劇場との共同創作や、様々な分野で表現に携わる35歳以下の若者を対象とした短期研修プログラム「表現/社会/わたしをめぐる冒険」を開催し、従来の劇場の役割を超えた「未来の劇場」の可能性を示唆する活動を展開した。

令和5年度（第74回）芸術選奨 贈賞理由一覧　　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	ルシール・レイボズ 仲西　祐介	東日本大震災後に東京から京都に居を移し、わずか2年で「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」を創設。国内外から多数の写真家を招聘（しょうへい）し、10年の間に世界有数の写真祭に育て上げた。2023年には、音楽フェスティバル「KYOTOPHONIE」も開催。二人の関わりが深いフランス、アフリカ諸国、ブラジルなどの表現者を日本に紹介したことは、特に意義深い。活動拠点を京都市内の出町桝形（ますがた）商店街に置き、地元コミュニティーとの交流も積極的に行っている。
評論	鈴木　聖子	舞台・映画で情味深い演技を見せた小沢昭一は、俳優とは、芸能とは――と自ら問う人でもあった。1970年代、全国の門付芸（かどづけげい）などを訪ね歩き、録音したLPシリーズを残している。本書はこの稀有（けう）な仕事と向き合う。丹念な調査・取材に基づく学術性と人間的洞察を兼ね備え、葛藤、矛盾を引き受けて小沢が到達した境地を浮上させる。なおかつ一冊を通じ、伝統音楽・芸能を「保護」する営為への真摯な問いが響き続けている。その点でも、芸術選奨文部科学大臣賞を贈られるべき成果である。
評論	マイク・モラスキー	本書は19世紀に遡るアメリカ史の大きなスパンの中で、ヨーロッパ音楽の典型といえる鍵盤楽器がいかに解放奴隷によってまず飼い馴（な）らされ、人種を超えて共感を受け、ほかに類のない即興芸術を創造してきたかを掘り下げている。ピアニストが育った都市の気質や活動都市の興行界の大枠に触れつつ、個人としての豊かなエピソードやインタビューを適材適所配し、その理解を踏まえて傑作録音の聴きどころに、自らのピアノ演奏経験を活（い）かして具体的に言及している。アメリカ文化と音楽について教わる点が多いばかりか、文の構成もまた巧みで授賞に値する。

令和5年度（第74回）芸術選奨
文部科学大臣新人賞　贈賞理由

令和5年度（第74回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	生田　みゆき	イスラエルに収監されるパレスチナ人政治犯の「日常」を再現する「占領の囚人たち」では、キャストとともに現地を訪れ、その体験をも作劇に織り込むことで、日本の観客に距離感なく過酷な現実を知らしめた。“産む性”である故に葛藤する三世代の女性の物語が同時進行する「アナトミー・オブ・ア・スーサイド」では、緻密に絡み合う重唱の楽譜にも似た実験的な戯曲を、果敢かつ丹念に解析した。「いま」をとらえる知性と感性に加え、困難を具現化する胆力と行動力にも恵まれた、頼もしき新鋭である。
演劇	中村　勘九郎	技芸に優れ、古典から新作まで時代物、世話物を問わず人物を活写している。舞踊でも力量を発揮し、今後の活躍が大いに期待される。祖父十七世中村勘三郎初演の舞踊「大江山酒呑童子（おおえやましゅてんどうじ）」では、愛らしい童子姿を見せ、酔態から鬼への変化も見事であった。「金閣寺」の久吉では確かな台詞廻（まわ）しで古典の二枚目らしい品位と清潔さを感じさせた。新歌舞伎「新門辰五郎（しんもんたつごろう）」で務めた会津小鉄（あいづのこてつ）のシャープさと情味を併せ持つ造形も光った。
映画	池松　壮亮	池松壮亮氏は、2003年の映画デビュー以来、60本近い出演作のジャンルを問わず、常に映画の中で存在感を示し、その空間の品位を高めることに貢献してきた。2023年も「せかいのおきく」では下層の青年役をリアルに演じ、「白鍵と黒鍵の間に」では市井のピアニストに扮（ふん）し、そして「シン・仮面ライダー」では、苦悩するスーパーヒーローを演じた。それぞれ監督との強い共犯関係を築き、一貫して真摯に役柄に取り組み、映像表現の新たな可能性を提示してみせた。今後のさらなる飛躍を期待したい。
映画	鶴岡　慧子	およそ400年前から変わらず、バカ丁寧に48工程の手間をかけて生み出される漆器（しっき）「津軽塗」は「バカ塗り」と呼ばれる。この伝統工芸を継ごうとする娘をじっと見つめる映画「バカ塗りの娘」では、鶴岡慧子氏の胆力に感服させられるとともに、映画もまた、手間暇かかる、人の手による創作物であることに改めて気付かされる。130年に迫る歴史と社会的地位の変遷から、昨今映画は「伝統芸能」と呼ばれたりもするが、どっしりと揺るがず伝統を継ぐ氏への期待は高まる。
音楽	大西　宇宙	声量の充実、言葉の丁寧な扱い、表現のこまやかさ。大西宇宙氏はあらゆる点において、現在、一頭地を抜いた我が国のバリトンであり、2023年は、多様なジャンルでそれを証明してみせた。ワーグナーの「ニュルンベルクのマイスタージンガー」（びわ湖ホール）では、パン屋コートナーに滑稽（こっけい）にして不遜（ふそん）という輪郭をくっきりと付与。「ドン・ジョヴァンニ」（兵庫県立芸術文化センター）題名役での活躍もさることながら、脇役をここまで造形できるのは、優れたオペラ歌手の証である。ほかに、井上道義氏作曲のオペラ、バッハ・コレギウム・ジャパンとのシューベルト「ミサ曲第5番」なども忘れがたい。
音楽	菊央　雄司	江戸時代の地歌箏曲家（じうたそうきょくか）は、歌、三絃（さんげん）、箏（そう）、胡弓（こきゅう）とともに、表芸である平家も演奏した。菊央雄司氏は、その全ての伝承を現在につなぐ稀有（けう）な存在である。令和5年には、それら全てに優れた活躍があった。伝承の危機にある平家の担い手としての実力を示し、大阪の菊原琴治（きくはらことじ）系統の胡弓の魅力を紹介した。「菊央雄司地歌演奏会」では、菊原琴治の時代の「野川三味線」を用いて、作物（さくもの）、繁太夫物（しげたゆうもの）、三味線組歌を演奏し、地歌に伝わる多彩な声の表現と大阪系の三絃の豊かな音色を、高い技量と表現力で披露して観客を魅了した。
舞踊	秋山　瑛	海外での活動を経て平成28年東京バレエ団に入団した秋山瑛氏は、古典から近・現代にわたる同団レパートリーを次々に踊り、正確な技術と鋭敏な感性で観客の心を捉えてきた。近年の成長は著しく、令和5年「ジゼル」での繊細かつ凛（りん）とした心理表現、「眠れる森の美女」の圧倒的な華やぎは、バレエダンサーとして確実にスケールアップしたことを印象付けた。また金森穣の新作「かぐや姫」では自ら創造に関わりつつ表現を紡ぐ新たな領域に挑み、主人公の孤独と神秘性をしなやかな動きで可視化。輝きを増す表現は、更なる飛躍を期待させる。

令和5年度（第74回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	速水　渉悟	速水渉悟氏は、平成27年ユース・アメリカ・グランプリNYファイナル金賞、審査員特別賞などを受賞し、アメリカでキャリアを積んだ後、平成30年新国立劇場バレエ団に入団。以後華麗なテクニックと豊かな表現力で令和2年主役デビュー。令和5年6月「白鳥の湖」終演後舞台上でプリンシパルに昇格。2023/2024シーズン開幕初日を飾る米沢唯との10月「ドン・キホーテ」では音楽性溢（あふ）れる強靭（きょうじん）、華麗なテクニック、表現で粋なバジルを演じ切り観客を魅了した。その後も主演が続き将来が大いに期待できる。
文学	高瀬　隼子	高瀬隼子氏の「いい子のあくび」は、「いい子」を演じ続け憤懣（ふんまん）をためてきた女性が主人公で、その周囲を見る目には強烈な毒が伴う。スマホをいじりながらの歩行など日常の「小さな社会問題」を取っ掛かりにしつつも、単純なメッセージ発信に主眼があるわけではなく、惰性化した現実認識を鋭く痛烈に破壊しながら、爽快なほど転覆的な語りが展開される。文章にも隙が無く一文一文に軽快なスパイスが効き、複雑で多層的な言葉の世界の構築を助けている。作家の知性と透徹した洞察力が感じられる作品で、文部科学大臣新人賞にふさわしい小説的達成に至っていると思われる。
美術A	安藤　正子	安藤正子氏は、独特の視点から高度な絵画技術をもって優れた絵画作品を制作しているが、近年は陶、映像、インスタレーションなどの表現も併せて展開している。家族や身辺の諸事に目を留め、変化や移ろいを様々な手法で視覚化させる表現は自然や人の「生」そのことに向けられている。「安藤正子展　ゆくかは」は、代表作の絵画作品から新作まで、氏のこれまでの創作営為を総覧する展覧会であった。 現在、世界の至る所で起きている多くの厄災に対して、氏は自らの生活圏内で日々の光陰を見つめ、存在の様相を深い感情で掬（すく）い上げ向き合おうとする。その精神と大いなる試みは今後さらにその芸術の領野を広げてゆくことが期待される。
美術A	大巻 伸嗣	大規模なインスタレーションを展開する大巻伸嗣氏は、鑑賞者の身体感覚に働きかけ、展示空間を非日常的な空間に変容させる。今回発表された「Gravity and Grace」の最新バージョンとともに、真っ暗な展示室で発表された「Liminal Air Space-Time 真空のゆらぎ」は、風を孕（はら）むことで刻々と動き、変化する布の姿が観客を圧倒する。量感を変化させ続ける新しい彫刻の可能性を示してもいる。近作の言語と映像による作品を含め、人間存在自体を問う彫刻家の今後を期待したい。
美術B	梅田　哲也	令和5年の梅田哲也氏の活動の中で、とりわけ個展「wait this is my favorite part　待ってここ好きなとこなんだ」で極めてユニーク且つ優れた作品が発表された。氏が作品の素材とするのは、音、光、影、記憶そして開催地の歴史等、形のないものばかりだが、強く人の心に響き印象を残す。既存の建物や土地、それに付随するものが装置としてあるが、現象の鑑賞体験が実存する全てである。一貫した20年余りの創造的行為がこの個展に結実され、さらに今後が期待される飛躍の年となった。
美術B	西澤　徹夫	それ自体が観られる対象となるまでに際立たせることが建築の目標になって久しい建築界の中で、西澤徹夫氏は、それとは全く逆に、そこでの人々の振る舞いを一つの質に整えながらも、各人それぞれが自由に振る舞える背景としての建築のあり方を模索し実現してきた。こうした、主役のあり方を規定しつつも、そこを偶然が羽ばたく場とする脇役に徹する試みを、建築ではなく自らの個展という別の形において緻密に構成しきったことは、この方法がより広がりのある可能性を持つことを証明したと言え、高く評価できる。

令和5年度（第74回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	加藤　隆生	リアルな場で大勢が集まってプレイする謎解き体験「リアル脱出ゲーム」を作り出し、ありとあらゆる工夫と挑戦を繰り広げ展開してきた加藤隆生氏とその仲間たちは、常にファンを増やし続けてきた。幕張メッセのホールをフルに使った大規模な「終わらない夏祭りからの脱出」や、継続的な常設店舗での展開、実験的な試み、家庭で遊ぶパッケージ型のリリースなど、その活動は、謎解きのみにとどまらずエンターテインメントの世界全体に影響を与えている重要な取組である。
メディア芸術	和田　淳	和田淳氏のアニメーションは、我々の五感を刺激する。体毛の手触り、耳元で聞こえる息遣いと吐く息の匂い、滑るような肢体の柔らかさなど、この作品は我々が忘れかけていた感覚を呼び覚まし、それを味わう快感を思い起こさせてくれる。 氏の作品が、奇抜な設定と個性的なビジュアルにも関わらず、広く世界中の人々の支持を集めている理由は、氏の高い作画技術とともに、これらの、人類に共通した感覚の核心を突いているからではないだろうか。
放送	石原　大史	「“冤罪”（えんざい）の深層～警視庁公安部で何が～」は、不正輸出の冤罪（えんざい）が生み出された深層／真相を徹底した取材で明らかにする調査報道の傑作である。企業、警視庁公安部、経産省など関係者への取材、法廷での生々しい証言、内部告発の手紙の文面、輸出機械の構造、規制に関する資料など番組で提示される情報は全て具体的で、重要な証言は番組独自の取材から得られている。ジャーナリズムの志を貫く姿勢、報道番組としての構成、共に優れており、現代社会に深く切り込む石原大史氏の取組は芸術選奨文部科学大臣新人賞に値する。
放送	長田　育恵	長田育恵氏は劇作家として主要な演劇賞を受賞している。テレビドラマの脚本作品は多くないが、志賀直哉（しがなおや）原作の「流行感冒」(2021年NHK)では確かな人間描写で高く評価された。「らんまん」では、モデルとなった植物学者・牧野富太郎博士が多くの障壁に直面しながらも、「名もなき草はない」という思想を貫く姿を生き生きと描いた。妻をはじめとする多彩な登場人物へのまなざしも一貫しており、演劇で培った力量が放送の世界でも発揮されることを大いに期待したい。
大衆芸能	桂　小すみ	甲高（かんだか）い喋（しゃべ）りが明るい。達者な三味線と唄は通常の寄席の俗曲（ぞっきょく）にとどまらず、洋楽と邦楽の折衷に、観客の驚きと笑いを生み出す。三味線を置いて他の楽器を取り出すこともしばしば。元々の音楽歴に、寄席囃子（よせばやし）での相当の蓄積ののちに、前座修業から音曲師（おんぎょくし）として高座に上がり、その全てを紡ぎながら、この数年での芸の駆け上がりは目を瞠（みは）るものがある。三味線のベースの上に、かつてない寄席の芸が生み出された。大きな期待ができる。
大衆芸能	ねづっち	落語家の心得の一つである謎かけを、子供から大人までエイジレスで楽しめる芸に昇華させた功績は唯一無二。漫談家としての話芸も群を抜き、平成23年より開催中の単独ライブ「ねづっちのイロイロしてみる60分」では、50分近い漫談で観客を釘付（くぎづ）けにする。YouTube「ねづっちチャンネル」の登録者は25万人を超え、毎日新ネタをアップする日常を10年来続けている。落語芸術協会、漫才協会に所属し、年間出演数は約500回。寄席芸人としての存在感も目を見張る。
芸術振興	今西　善也	京都祇園の老舗和菓子屋の店主として伝統を守り続けるかたわら、時代に合った菓子づくりも試みている。他方、文人墨客（ぶんじんぼっかく）に愛され、文化サロンとして機能していた店の理念を受け継ぎ、文化芸術を支援。2021年に美術館「ZENBI- 鍵善良房 -KAGIZEN ART MUSEUM」を開設した。鍵善が保有する美術工芸コレクションを公開する一方、2023年には京都出身の現代アーティスト宮永愛子の個展を開催。民間における芸術振興の模範例の一つと呼べるだろう。

令和5年度（第74回）芸術選奨 贈賞理由一覧　　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	川崎　陽子	川崎陽子氏は、京都国際舞台芸術祭の3人の共同ディレクター（他は塚原悠也氏、ジュリエット・礼子・ナップ氏）の統括的立場として、国内外の「実験」的な舞台芸術を創造・発信し芸術表現と社会を繋（つな）ぐというミッションを継承しつつ、さらに関西圏の歴史・文化資産を活用した地域振興、令和5年からは継続的な運営の柱として寄付を募る「KEXサポーター」制度を開始。芸術祭を新しい切り口で持続可能な国際的なプラットフォームとして発展させた功績は大きい。
評論	原　瑠璃彦	原瑠璃彦氏は、本来、海辺の風景をさした洲浜（すはま）が、平安時代以来の文化の中で、いかなる意味を持ち、機能してきたかを横断的に論じる。左右に分かれて、和歌を詠み優劣を競う歌合（うたあわせ）において、モノとしての洲浜台（すはまだい）が使われたことに着目する。本書の特色は、和歌にとどまらず、美術、庭園、宗教、能楽にも関わる洲浜の表象を、野心的に渉猟する強い意志にある。今後の展開を期待させる業績となった。
評論	堀　朋平	「未完成交響曲」の不完全な儚（はかな）さ。歌曲集「冬の旅」の果てしない彷徨（さまよ）い。弦楽四重奏曲「死と乙女」の強迫的妄執。シューベルトの音楽は、現代人のかたち定かならず不安に苛（さいな）まれる心を尖鋭（せんえい）に先取りする。本書はそんな作曲家の見事な分身だ。書物そのものが、シューベルトの影法師であるかのような捉えがたい迷宮的構造を有する。作曲家の魂と同行二人となって、幽体離脱するかのように時空を駆け巡る。極端に微視的か、極端に巨視的か。中庸に収まるところがない。シューベルトはそのようにしてしか論じられぬと本書は教える。組立ての独創性において傑出した音楽批評である。堀朋平氏の今後に期待する。

令和5年度（第74回）芸術選奨
選考経過

令和5年度（第74回）芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として19名の推薦があった。古典から現代まで、また、俳優・演出家など顔ぶれは広範にわたる。 第一次選考審査会では、今年度から文部科学大臣新人賞受賞枠が1増されたことへの好感が表された後審議に入り、各委員が提出した推薦理由をもとに忌憚（きたん）なく意見を交わした。結果として、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞7名を受賞候補に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、選考審査員それぞれが候補者個々の実績などへの所見を改めて述べた後細部にわたって検討を重ね、文部科学大臣賞には、多彩な役柄を演じ力量を示したとして片岡愛之助氏、演者自身の個性が役柄の造形と相まって忘れがたい印象を残したとして山西惇氏を選出した。 次いで文部科学大臣新人賞には、花形の存在感を示したとして中村勘九郎氏、清新で刺激的な舞台空間を作り上げ将来への期待を抱かせたとして生田みゆき氏を選出した。なお、文部科学大臣賞・文部科学大臣新人賞双方で推薦された候補の検討に時間が割かれたこと、文部科学大臣新人賞候補の評価が伯仲したことを付記しておきたい。
映画	映画部門では選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として12名、文部科学大臣新人賞候補者として15名が推薦された。第一次選考審査会では文部科学大臣賞候補者6名、文部科学大臣新人賞候補者5名を最終候補に絞り込み、第二次選考審査会に臨んだ。 文部科学大臣賞は候補者の監督・俳優について選考審査員がそれぞれの意見を述べ、激しい議論と検討を重ねた。「春に散る」ほかで主役でも脇役でも存在感を示し、日本映画における後進の指導を含め自己の役割を認識していると佐藤浩市氏を推す声が多数を占めた。また数人の監督について意見が分かれたが、「キリエのうた」の岩井俊二氏が独自の映像スタイルを守り続けながら映画を撮り、音楽と数奇な物語を融合させた力量を評価し両名を選出するに至った。 文部科学大臣新人賞は作品に対して真摯に向き合う監督の鶴岡慧子氏の姿勢が高く評価され、またテイストの異なる映画にそれぞれ自らの解釈で取り組む池松壮亮氏を選出した。
音楽	音楽部門には、文部科学大臣賞の候補として推薦委員及び選考審査員から合わせて13名、また、文部科学大臣新人賞には、同じく10名の推薦があった。まず、第一次選考審査会において、推薦委員からの書類、選考審査員からの書類及び口頭による意見を踏まえ、文部科学大臣賞に5名、また文部科学大臣新人賞に6名が候補として絞り込まれた。 更なる業績の確認等を経て開催された第二次選考審査会においては、活発な議論が行われ、厳正かつ公正なる審査の結果、文部科学大臣賞2名、文部科学大臣新人賞2名が選出された。 杉山洋一氏の同時代作品、新作初演から古典まで、多様なレパートリーでの充実した活動には、目を見張るべきものがあった。一方、福原徹氏は一貫して続けてきた「徹の笛」と題されたリサイタルが令和5年度第13回を迎え、このジャンルに新たな地平を開いたことをはじめ、幅広い活躍が高く評価された。 また、文部科学大臣新人賞の大西宇宙氏のオペラを中心とした多彩な業績、菊央雄司氏の自ら主催した演奏会をはじめとする活動も、それぞれ、今後の更なる発展、深化を強く期待させた。 いずれも、芸術選奨にまさにふさわしい業績であった。
舞踊	舞踊部門では選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として19名、文部科学大臣新人賞候補者として16名の推薦があった。うち3名は両賞への推薦であった。第一次選考審査会では文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は4名に候補者を絞り込んだ。 第二次選考審査会での慎重な審議の結果、文部科学大臣賞には、スターダンサーズ・バレエ団常任振付家鈴木稔氏が、バレエ「ドラゴンクエスト」や「MISSING LINK」の成果についての高い評価で、平成元年度の芸術選奨文部大臣新人賞受賞以来着実に実績を積み上げての受賞となった。今ひとりは地唄舞の吉村古ゆう氏で、「こうの鳥」や「善知鳥（うとう）」などが評価された。舞手の払底が叫ばれる中、芸の力量と内面の充実を研鑽（けんさん）してきた努力が報われた。 文部科学大臣新人賞には東京バレエ団の秋山瑛氏が全3幕初演の「かぐや姫」や「ジゼル」ほかの成果によって年間を通しての舞台に高い評価を得た。もう一人は新国立劇場バレエ団の速水渉悟氏が「ドン・キホーテ」や「白鳥の湖」ほかの成果で選出された。共に将来性が大いに期待されての受賞であった。

令和5年度（第74回） 芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
文学	文学部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として9名、文部科学大臣新人賞候補者として8名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名に候補者が絞られた。第二次選考審査会で討議の結果、ほぼ全員の賛同を得て、次の受賞者が決まった。 文部科学大臣賞には、柴崎友香氏、乗代雄介氏が選ばれた。柴崎氏の「続きと始まり」は、居住地も境遇も異なる3人の日常を、過去の記憶や人間関係を織り込んで重層的に描き、定まらない生の肌触りとささやかな意志を見出そうとした、いわば柴崎文学の集大成となった。乗代氏の「それは誠」は、高校2年の男子生徒が東京への修学旅行の自由行動日に、長らく会えていない叔父との再会を計画、同じ「班」の同級生たちはその計画に協力できるのか――青春小説の伝統を受け継ぎながら、生きることの慄（おのの）きと歓（よろこ）びを鮮やかに表現した。 文部科学大臣新人賞には、高瀬隼子氏の「いい子のあくび」が選ばれた。日常への違和感や悪意を掬（すく）いあげ、そこから生まれた衝動的行動がもたらす亀裂の行方を巧みな物語展開で追う。才気溢（あふ）れる作品である。
美術A	美術A部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者13名、文部科学大臣新人賞候補者16名の推薦があった。第一次選考審査会では、全ての候補者の推薦書や推薦の根拠となった資料を基に、選考審査員全員が受賞にふさわしい候補者及びその理由を述べた上で慎重に協議を行い、文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞5名を第二次選考審査会の候補者とした。 第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ作家の作品と業績について更に慎重に協議した後、投票を行った。その結果、文部科学大臣賞は須藤玲子氏、蔡國強氏の2名が過半数を得票して受賞が決定、文部科学大臣新人賞は、安藤正子氏、大巻伸嗣氏の2名が過半数を得票して受賞が決定した。須藤氏は布という素材を多様に活（い）かした「須藤玲子：NUNOの布づくり」展ほかの成果、蔡氏はこれまでの活動を再定位する「蔡國強　宇宙遊（うちゅうゆう）－〈原初火球〉（げんしょかきゅう）から始まる」展、安藤氏は堅実な絵画表現を示した個展「安藤正子展 ゆくかは」など、大巻氏は「大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ」展などの光や空気の動きを体感させるダイナミックな表現が評価された。
美術B	美術B部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者9名と文部科学大臣新人賞候補者11名が推薦された。第一次選考審査会では、候補者の作品や活動及び推薦理由に関して意見交換し、慎重に審議した上で投票を行い、文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名の候補者に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ作家の作品と業績について積極的な意見交換と審議をした上で投票を行った。文部科学大臣賞は石川真生氏と宮本佳明氏が、文部科学大臣新人賞は梅田哲也氏と西澤徹夫氏が、ともに過半数の支持を経た上で、全員の賛同を得て選出された。 文部科学大臣賞の石川氏は集大成となる個展で、沖縄の現実を突きつけるべく、写真家としての生きざまを圧倒的な迫力で示したこと、宮本氏は従来の建築展を創造的に逸脱する企画展で、建築家としての思想と矜持（きょうじ）をひらいてみせた姿勢が、ともに高く評価された。文部科学大臣新人賞の梅田氏は場への介入による体験型作品を各所で旺盛に展開し、西澤氏は美術展会場構成など、協働することによって建築家の緻密で豊かな存在を示し得た成果が、ともに高く評価された。
メディア芸術	メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補として11名、文部科学大臣新人賞候補として15名が推薦された。第一次選考審査会により、文部科学大臣賞は6名、文部科学大臣新人賞は8名に候補を絞り込んだ。 第二次選考審査会では各作品の表現方法や影響、意義など踏み込んだ議論が交わされた。また、メディア芸術部門は、アニメーション、マンガ、ゲーム等、比較検討するのが難しいジャンルの多様さがあり、さらにそれらが境界を超え新しい領域を作り出すパワーについても議論が及んだ。 文部科学大臣賞は、井上雄彦氏と田村由美氏の2名。「THE FIRST SLAM DUNK」の井上氏は、アニメーション初監督でありながら、すさまじいクオリティと表現力で観る者を圧倒した。田村氏は、数々の作品を生み出し続け、さらに意欲的に作風を変えてチャレンジした「ミステリと言う勿（なか）れ」の面白さで我々を打ちのめした。 文部科学大臣新人賞は加藤隆生氏と和田淳氏。加藤氏は、体験型エンターテインメント「リアル脱出ゲーム」の創始者であり、15年以上も作品を産み続けており、その影響力の大きさが高く評価された。和田氏は、アニメーション「いきものさん」による、独自の作家性、それを貫く姿勢により選出された。 意見が割れることもあったが、議論を積み重ね、最終的には選考審査員全員の一致により以上4名に決定した。

令和5年度（第74回）芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
放送	放送部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補に12名、文部科学大臣新人賞候補に11名の推薦があった。令和5年度から文部科学大臣賞原則2名まで、文部科学大臣新人賞原則2名までと、その選出枠が増えたことを踏まえ、第一次選考審査会では、候補者の活動に関する多角的な議論を行い、文部科学大臣賞候補7名、文部科学大臣新人賞候補7名に絞った。 第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ候補者の作品の視聴やその業績についての確認などを行った選考審査員に、改めて候補者を推挙してもらったところ、全ての選考審査員の意見が一致する形で脚本家の野木亜紀子氏と、プロデューサーの山﨑裕侍氏を文部科学大臣賞に早々に決定した。 文部科学大臣新人賞に関しても、選考審査員に改めて候補者を推挙してもらったところ、圧倒的多数で脚本家の長田育恵氏とディレクターの石原大史氏を文部科学大臣新人賞に決定した。 文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞とも、ドラマの脚本家とドキュメンタリー制作者の受賞となった。昨年までの審議の過程では、異なるジャンルでの専門的な仕事を一緒に評価するのに苦慮する場面が多々あったのに比すると、受賞枠の拡大が功を奏する結果となった。
大衆芸能	大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者14名、文部科学大臣新人賞候補者16名の推薦があり、第一次選考審査会で文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞共に候補者を6名に絞り込んだ。 文部科学大臣賞は落語、講談、漫才と、ポップス、ロック、ジャズなど様々なジャンルから候補者が揃（そろ）った。活動実績と推薦理由に基づき活発な議論がなされた結果、寄席でトリをとる実力者であり、講談協会会長としても講談界のために尽力する宝井琴調氏と、チェッカーズのリードボーカルとして絶大な人気を誇り、バンド解散後はソロ活動を展開し、デビュー40周年を迎えた歌手の藤井フミヤ氏が選ばれた。 文部科学大臣新人賞は落語、漫才、浪曲、漫談からジャズ、ポップスなどと多種多彩な候補が並び、長いコロナ禍をくぐり抜けて、活況を取り戻しつつある大衆芸能の今後を大いに期待させた。候補者の業績について多面的に議論が重ねられた結果、謎かけを演芸の一ジャンルに育てた漫談家のねづっち氏と、伝統を継承しながら、洋楽を見事に取り入れた高座で寄席に新風を吹き込む音曲師（おんぎょくし）の桂小すみ氏が選出された。
芸術振興	芸術振興部門は、文部科学大臣賞21名、文部科学大臣新人賞12名の候補者推薦があった。第一次選考審査会で文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞共に5名に絞られ、第二次選考審査会での討議となった。昨年度までは文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞いずれも原則1名以内の受賞と規定されていたが、今回より、原則2名以内と変更になっている。選考審査会では、他部門では評価されづらい、プレイヤーやパフォーマー以外の方にも目を配るべきとの意見があり、また地道な活動を続ける地方の文化芸術運動のディレクターや制作者を応援したいという意識も共有されていた。最終的に文部科学大臣賞は長野県上田市で文化施設運営等に尽力されている荒井洋文氏と「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」を創設したルシール・レイボズ氏、仲西祐介氏に決定した。また、文部科学大臣新人賞は「ZENBI−鍵善良房−KAGIZEN ART MUSEUM」館長の今西善也氏と「KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭」のディレクターである川崎陽子氏に決定した。コロナ禍の影響がまだまだ残る、厳しい環境の中、成果を挙げている受賞者の更なる活躍を心より願っている。
評論	評論部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として21名、文部科学大臣新人賞候補者として12名が推薦された。第一次選考審査会では慎重審議の結果、文部科学大臣賞については7名、文部科学大臣新人賞については5名に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、各候補者について忌憚（きたん）のない活発な議論を尽くした上で、文部科学大臣賞には鈴木聖子氏とマイク・モラスキー氏を選出した。鈴木氏の「掬（すく）われる声、語られる芸 小沢昭一と『ドキュメント 日本の放浪芸』」は、稀代（きだい）の芸人・俳優による「放浪芸」の採集行為が持つ文化史的意義を炙（あぶ）り出した労作であり、モラスキー氏の「ジャズピアノ——その歴史から聴き方まで」（上・下）は、「ジャズピアノ」の歴史を精細に跡付けつつ、随所に個性的な創見を散りばめた大著である。 また文部科学大臣新人賞には、原瑠璃彦氏と堀朋平氏を選出した。「洲浜（すはま）」という興味深い主題を文学・美術・庭園など多様な角度から考究した原氏の「洲浜論」と、混沌（こんとん）とした「知」が躍動するパセティックな文体で後期シューベルトを論じた堀氏「わが友、シューベルト」は、気鋭の新人にふさわしい野心的な二著作として高い評価を得た。

芸 術 選 奨 実 施 要 項

令 和 5 年 4 月 4 日
文 部 科 学 大 臣 決 定

1　趣旨

芸術各分野において、毎年、優れた業績をあげた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞又は芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

2　部門

（1）　演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家、演出家、演技者、舞台美術家等）
（2）　映画（劇映画・記録映画等の演出家、脚本家、撮影者、演技者等）
（3）　音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家、指揮者、作曲家、演出家、舞台美術家等）
（4）　舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家、演出振付家、舞台美術家等）
（5）　文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家、翻訳家等）
（6）　美術Ａ（絵画（版画含む）・彫刻（インスタレーション含む）・工芸・書等の作家）
（7）　美術Ｂ（建築・デザイン・写真・映像・メディアアート・その他の新傾向の作家）
（8）　メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）
（9）　放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家、演出家、演技者等）
(10)　大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショウ・ポピュラーミュージック等の作家、作曲家、演出家、演技者等）
(11)　芸術振興（新しい領域や複数の部門・分野にわたり文化芸術活動を行っている者）
(12)　評論（芸術活動に対して、活字等によって批評を行うことで芸術活動を支える芸術評論家等）

3　賞の対象

（1）　賞は、文部科学大臣賞状及び賞金とする。
（2）　芸術選奨文部科学大臣賞は、特に優れた業績をあげた芸術家等（原則として個人）を対象とするもので、各部門２名以内を原則とする。
（3）　芸術選奨文部科学大臣新人賞は、新人の芸術家等（原則として個人）を対象とするもので、各部門２名以内を原則とする。

4　選考の時期

選考は、毎年、原則として１月中に行うものとし、選考の対象となる業績は、主として前年の１月から前年の１２月までの間にあげられたものとする。

5　選考方法

（1）　文化庁長官は、実演家、専門家及び学識経験者の中から各部門の選考審査員及び推薦委員を委嘱する。ただし、評論部門には推薦委員を設けない。
（2）　各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦する。ただし、芸術振興部門及び評論部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも推薦することができるものとする。また、美術Ａ部門及び美術Ｂ部門の推薦委員は、美術Ａ・Ｂ部門のいずれにも候補者を推薦できるものとする。
（3）　各部門の選考審査員を構成員とした選考審査会を設置し、審査を行う。
（4）　文部科学大臣は、選考審査会における審査結果を尊重して、受賞者を決定する。

6　実施細則

芸術選奨実施要項の実施に関して必要な事項は、文化庁次長が別に定める。

芸 術 選 奨 実 施 細 則

平成１１年　５月１３日
文　化　庁　次　長　決　裁
一部改正平成１３年　１月　６日
一部改正平成１５年　４月　１日
一部改正平成１６年　４月　１日
一部改正平成１９年１２月２６日
一部改正平成２４年　４月　１日
一部改正令和　５年　４月　４日

１　趣旨

この細則は、芸術選奨実施要項（令和５年４月４日文部科学大臣決定）６の規定に基づき、芸術選奨実施要項の実施に関して必要な事項を定める。

２　選考対象者

選考に当たっては、下記のことに留意する。

（１）　過去に芸術選奨文部科学大臣賞又は同新人賞を受賞した者は、同一部門の同種の賞については対象としない。

（２）　文化功労者、日本芸術院会員、重要無形文化財（各個認定）保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者については対象としない。

（３）　当該年の業績に加え、将来性、年齢、他の受賞歴等の過去の業績等も勘案するとともに、物故者は対象としない。

（４）　受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は７０歳未満、新人賞は５０歳未満とする。

（５）　受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

３　賞の対象にかかる補足事項

（１）　実施要項２（11）芸術振興部門において定める「新しい領域や複数の部門・分野にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次の者をいう。

①新たな芸術分野を創造し、又は普及させるなど著しい貢献のある者

②複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者

③他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内若しくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

（２）　実施要項３（３）に定める「新人の芸術家等」とは、次の者をいう。

①活動の期間及び実績が比較的少ないこと。

②今後活躍が大いに期待されること。

４　その他

（１）　選考審査員及び推薦委員の任期は１年とする。ただし、再任を妨げない。

（２）　選考審査員及び推薦委員は、次に掲げるものに該当すると自ら判断する場合又は選考審査会等において判断された場合は、推薦及び選考に参画しないものとする。

①親族関係又はそれと同等の親密な個人的関係

②選考の対象である活動を企画した者である場合

③選考の対象である活動の指導を行う者若しくは出演者又は出品者である場合

④密接な師弟関係

⑤上記①から④に掲げるもののほか、利害関係を有すると考えられる関係

（３）　選考過程については、非公開とする。又、選考審査員及び推薦委員は、選考に関して知り得た秘密を漏らしてはならない。選考審査員及び推薦委員でなくなった後においても、同様とする。

（４）　文部科学大臣は、被表彰者としてふさわしくない非行行為、被表彰者に係る提出書類に不実又は虚偽の記載の事実が判明した時は、被表彰の決定を取り消すことができる。

令和5年度（第74回）芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】	
犬丸　治	演劇評論家
亀岡　典子	産経新聞文化部特別記者編集委員
古城　十忍	劇作家・演出家
小玉　祥子	演劇ジャーナリスト
児玉　信	藝能学会副会長、邦楽プロデューサー
立花　恵子	演劇評論家
伊達　なつめ	演劇ジャーナリスト
【映画部門】	
荒木　啓子	ぴあフィルムフェスティバルディレクター
勝田　友巳	毎日新聞専門記者
関口　裕子	ジャーナリスト、評論家、編集者
根岸　吉太郎	映画監督
野村　正昭	映画評論家
部谷　京子	映画美術監督
矢田部　吉彦	前東京国際映画祭ディレクター
【音楽部門】	
岡田　暁生	京都大学人文科学研究所教授
岡部　真一郎	明治学院大学文学部芸術学科教授
小畑　恒夫	昭和音楽大学客員教授
齊藤　裕嗣	國學院大學兼任講師
塚原　康子	東京藝術大学教授
野川　美穂子	東京藝術大学ほか非常勤講師
舩木　篤也	音楽評論家
【舞踊部門】	
阿部　さとみ	舞踊評論家
海野　敏	東洋大学社会学部教授
織田　紘二	元国立劇場理事
桜井　多佳子	舞踊評論家
新藤　弘子	舞踊評論家
宮辻　政夫	演劇評論家
望月　辰夫	舞踊プロデューサー
【文学部門】	
阿部　公彦	東京大学教授
荒川　洋治	現代詩作家
小島　ゆかり	歌人
松家　仁之	小説家
若島　正	京都大学名誉教授
【美術A部門】	
青木　野枝	彫刻家
O　JUN	画家、東京藝術大学名誉教授
加藤　泰弘	東京学芸大学教授
正村　美里	岐阜県美術館副館長兼学芸部長
関　直子	早稲田大学文学学術院教授
山梨　絵美子	千葉市美術館館長
横山　勝彦	呉市立美術館館長

【美術B部門】	
青木　淳	建築家
川上　典李子	デザインジャーナリスト、21_21 DESIGN SIGHTアソシエイトディレクター
髙橋　綾子	名古屋造形大学教授
丹羽　晴美	東京都現代美術館事業企画課長、学芸員
原　久子	大阪電気通信大学教授
やなぎ　みわ	美術作家、舞台演出家
【メディア芸術部門】	
岡本　美津子	東京藝術大学副学長・大学院映像研究科教授、プロデューサー
小西　利行	コピーライター、クリエイティブディレクター
時田　貴司	ゲームプロデューサー、東京藝術大学大学院映像研究科ゲームコース特別教授
東村　アキコ	漫画家
藤津　亮太	アニメ評論家
米光　一成	ゲーム作家
【放送部門】	
井上　由美子	脚本家
岡室　美奈子	早稲田大学教授
音　好宏	上智大学教授
里見　繁	関西大学社会学部名誉教授
中町　綾子	日本大学芸術学部教授
西村　与志木	放送プロデューサー
源　孝志	脚本家、演出家
【大衆芸能部門】	
川崎　浩	毎日新聞社客員編集委員
中村　真規	演芸プロデューサー（勘亭流・寄席文字・江戸文字書家―荒川区登録無形文化財）
萩原　健太	音楽評論家
日髙　美恵	演芸ライター
古川　綾子	大阪樟蔭女子大学准教授
安田　謙一	著述業
渡邉　寧久	演芸評論家、エンタメライター
【芸術振興部門】	
小川　敦生	多摩美術大学教授
小崎　哲哉	京都芸術大学大学院教授、ICA京都『REALKYOTO FORUM』編集長
武田　和	川喜多記念映画文化財団代表理事
長木　誠司	東京大学名誉教授
久野　敦子	公益財団法人セゾン文化財団常務理事
渡邉　大輔	批評家、映画史研究者、跡見学園女子大学文学部准教授
渡辺　弘	公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団ゼネラルアドバイザー
【評論部門】	
片山　杜秀	慶應義塾大学法学部教授
中条　省平	学習院大学教授
長谷部　浩	演劇評論家、東京藝術大学教授
細川　周平	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長
前田　恭二	武蔵野美術大学教授
松浦　寿輝	小説家、詩人、東京大学名誉教授
三浦　篤	東京大学名誉教授

【部門内五十音順】

令和5年度（第74回）芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】

新井　浩介	（公社）日本児童青少年演劇協会理事、日本児童・青少年演劇劇団協同組合理事
飯塚　友子	産経新聞記者
小山内　伸	演劇評論家、専修大学教授
神澤　和明	演出家、演劇評論家
児玉　竜一	早稲田大学教授
七字　英輔	演劇評論家
祐成　秀樹	読売新聞編集委員
出口　逸平	大阪芸術大学教授
林　尚之	演劇ジャーナリスト
坂東　亜矢子	演劇評論家
藤田　千史	川崎市アートセンターアルテリオ小劇場ディレクター
横山　太郎	立教大学教授

【映画部門】

明智　恵子	『キネマ旬報』編集長
阿部　久瑠美	鎌倉市川喜多映画記念館学芸員
石坂　健治	日本映画大学教授
岡田　秀則	国立映画アーカイブ主任研究員
上島　春彦	映画評論家
木村　直子	読売新聞文化部記者
金原　由佳	映画ジャーナリスト
諏訪　敦彦	映画監督、東京藝術大学大学院教授
浜田　毅	協同組合日本映画撮影監督協会代表理事
宮本　まさ江	衣装デザイナー

【音楽部門】

井口　はる菜	関西外国語大学外国語学部准教授
大田　美佐子	神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授
加納　マリ	日本音楽研究家
國土　潤一	音楽評論家
白石　美雪	武蔵野美術大学教授、音楽評論家
武内　恵美子	京都市立芸術大学准教授
谷垣内　和子	邦楽評論家
千葉　優子	宮城道雄記念館資料室室長
寺西　基之	音楽評論家
中村　孝義	学校法人大阪音楽大学理事長、大阪音楽大学名誉教授
山田　治生	音楽評論家
横原　千史	兵庫県立大学講師

【舞踊部門】

稲田　奈緒美	桜美林大学准教授
岡田　万里子	桜美林大学教授
岡見　さえ	共立女子大学准教授、舞踊評論家
楫屋　一之	神奈川県国際文化観光局舞台芸術プロデューサー
加藤　繁治	企画室「日本の藝」主宰、作詞家
唐津　絵理	愛知県芸術劇場エグゼクティブプロデューサー
菘　あつこ	舞踊ジャーナリスト
富田　大介	明治学院大学教員
平野　英俊	舞踊評論家
丸茂　美惠子	桜美林大学特任教授
村山　久美子	舞踊史家、舞踊評論家、早稲田大学非常勤講師
守山　実花	舞踊評論家

【文学部門】

阿部　賢一	東京大学准教授、翻訳家
石原　千秋	早稲田大学教授
辛島　デイヴィッド	早稲田大学国際学術院教授
栗木　京子	現代歌人協会理事長
齋藤　恵美子	詩人
沼野　充義	東京大学名誉教授
野崎　歓	放送大学教授
堀江　敏幸	作家、早稲田大学教授
正木　ゆう子	俳人
吉川　宏志	歌人

【美術部門】

今井　陽子	国立工芸館主任研究員
小谷　元彦	美術家、彫刻家
倉方　俊輔	大阪公立大学教授
小林　桂子	日本工業大学先進工学部情報メディア工学科准教授
佐藤　卓	グラフィックデザイナー
佐藤　時啓	美術家、写真家
沢村　澄子	書家
清水　穣	同志社大学教授
滝沢　恭司	町田市立国際版画美術館学芸担当係長
出原　均	アーツ前橋館長
成実　弘至	京都女子大学教授
服部　浩之	キュレーター、東京藝術大学大学院准教授
松永　真太郎	横浜美術館主席学芸員
宮　いつき	美術家、多摩美術大学名誉教授
宮永　愛子	美術家

【メディア芸術部門】

井上　明人	立命館大学映像学部講師
今井　晋	ゲームジャーナリスト
菅野　博之	神戸芸術工科大学芸術工学部まんが表現学科教授
須川　亜紀子	横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授
高瀬　康司	アニメーション研究者
土屋　綾子	編集者
西原　麻里	跡見学園女子大学文学部准教授
増田　展大	九州大学大学院芸術工学研究院講師
横井　周子	マンガライター
若見　ありさ	アニメーション作家、東京造形大学准教授

【放送部門】

安部　裕	日本大学芸術学部放送学科教授
磯山　晶	プロデューサー
伊藤　純	プロデューサー
入江　たのし	メディア・プロデューサー
岡田　惠和	脚本家
桜井　聖子	有限会社さくら代表取締役、プロデューサー
鈴木　嘉一	放送評論家
藤田　真文	法政大学社会学部メディア社会学科教授
吉川　邦夫	演出家
吉村　ゆう	シナリオライター、劇作家、演出家

【大衆芸能部門】

大友　浩	演芸研究家、文筆家
香取　良彦	作編曲家、演奏家
佐々木　透子	intoxicate編集長
佐藤　英輔	音楽評論家
長井　好弘	演芸評論家
中西　らつ子	イラストレーター
布目　英一	横浜にぎわい座館長・チーフプロデューサー
濱田　元子	毎日新聞論説委員、学芸部編集委員
原田　和典	音楽評論家
前田　憲司	芸能史研究家
村尾　泰郎	音楽・映画ライター
油井　雅和	毎日新聞記者

【芸術振興部門】

衛　紀生	可児市文化創造センターala シニアアドバイザー兼まち元気そうだん室長
掛尾　良夫	映画ジャーナリスト、映画祭ディレクター
さやわか	批評家、漫画原作者
廣川　麻子	特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク理事長、東京大学先端科学技術研究センター当事者研究分野特任研究員（ユーザーリサーチャー）
堀内　宏公	アーツカウンシル東京シニア・プログラムオフィサー

【部門内五十音順】

別紙

運営事務局（株式会社 JTB コミュニケーションデザイン
事業共創部 コンベンション第一事業局 営業第一課）宛
（E-mail： sensho2023@jtbcom.co.jp、TEL：070-3601-5421）

令和５年度（第 74 回）芸術選奨贈呈式・祝賀会　取材申込書

令和５年３月８日（金）１２：００必着

項目	記入事項
１ 代表者氏名	
２ 代表者ふりがな	
３ 所属先名	
４ 部署・番組名	
５ 参加人数	（名）
６ 種別	□ペン　□スチール　□ムービー
７ 受賞者への個別取材	□個別取材希望あり　□個別取材希望なし
８ 個別取材希望対象者名 （※「個別取材希望あり」	
９ ご連絡先（Tel）	
１０ ご連絡先（Mail）	
１１ 備考	

※本申込書に記載された個人情報は、本式典の参加者の把握及び緊急連絡先のみを目的として使用し、厳重に取扱うものとします。

※複数人申し込まれる場合は、代表者が人数分お申し込みください。

※受賞者の都合等により、個別取材をお受けできない場合もございますので、ご了承ください。